

すみれ女子短大 実野 利久

1. 離婚に対する社会の評価は一様ではない。ともあれ離婚が必要であることは否定し得ない。家政学が家族構成員それぞれの個性の発展と幸福とが公平に増進することに役立つ知識及び技術に関する学問（松平友子著家政学原論）と理解するならば、離婚が家庭管理・経済・教育その他に与える影響を検討し、個人の不幸特に女性の受ける被害を最少限に留めることができる対策を追求することは家政学研究の一つの目標とならなければならない。

2. 離婚の社会的意味を考えてみた。第一に家族緊張の解決としての離婚、第二に家族崩壊としての離婚を考えた。ついで離婚傾向の特質は地域的・階層的に分析した。そして離婚の社会的背景を追求した。以上を各種の統計、家裁、その他から得た資料を駆使して分析し、女高生、女子大生、職業婦人、主婦を対象として、それぞれの離婚観を調査した。

3. 離婚が姑嫁関係など、まだ前近代的原因によることを結論とし、それぞれの原因に対する対策を上記の資料及び調査に基づいて種々の仮説を樹立した。